

《研究ノート》

## 文学を通して考える神の聲・人の声

——*Macbeth* を中心として——

深 澤 清

### はじめに

本稿はウィリアム・シェイクスピア (William Shakespeare (1564-1616)) の戯曲 *Macbeth* を基盤にして古典文学作品の中から先人の智慧を探り、今後の糧にしようとするものである。すなわち、〈大学生〉の姿をこの作品の主人公である〈マクベス〉の姿に仮託し、若人が直面するであろう問題とその対処法について考察したものである。戯曲の梗概は最小限度に留め、作品を読んだことがない人でも理解してもらえるように配慮した。また、戯曲の内容を細かく分析した堅いものにならないよう工夫した。

一般的に大学生には家族や親戚、そして社会から抱えきれないほどの期待が寄せられるが、大学生は〈理想自己〉と〈現実自己〉との不一致を経験して、葛藤を抱くことが少なからずあるようである。Rogers による「自己実現 (self-actualization)」の問題<sup>1)</sup>、そして Higgins の「自己不一致理論」(self-discrepancy theory) においては、<sup>2)</sup>〈自己〉は自明の存在としてア・プリオリに設定されている。日々変化している自己を捕捉することは困難であると思うが、それでも「自己」が問題になる時は「理想自己」が誘因とされている。実際に大学生には自己の発現を促すための様々な検査が用意され、データ化された評価票が手元に渡される。「自己一致(自己受容)」があれば「十分に機能する人」(fully functioning person) となり、「実現傾向」(actualizing tendency) が発揮されていると評価される。逆にそれが大きく乖離すれば改善のためのアドバイスが示され、向上心を発揮することが求められる。一つの仮説として、このような将来へのアドバイス(言葉)は、*Macbeth* の冒頭で語られる魔女3人の〈予言〉がマクベスの人生を変えたように、私たちの運命を好ましくない方向に変える可能性を秘めていないだろうか。職域においては雑務に追われ〈ストレス〉を抱えている最中に、「ストレスチェック」などの質問票に回答が求められる現実がある。自己認識ツールとしての必要性は認めるが、場合によっては第2、第3のマクベスを生み出す可能性はないのだろうか。マクベスの心情を鑑み、同様の悲劇を繰り返さないための術を探ってみたい。まずは戯曲 *Macbeth* のあらすじについて短く解説する。

## あらすじ

舞台はスコットランド。スコットランド王・ダンカンに仕える將軍マクベスとバンクォーは、嵐の荒野で3人の魔女に出会う。魔女たちはマクベスがコーダーの領主となり、いずれはスコットランド王になると予言。バンクォーに対しては、国王にはならないが国王を生み出す方である、と予言した。直後に予言的中してマクベスはコーダーの領主となったが、ダンカン王は王位継承者を息子のマルカムにすると宣言。マクベスは自分が国王になるという次の予言が実現しないことを危惧し、これまでの一連の出来事をマクベス夫人に相談。夫人はマクベスと共謀してダンカン王を暗殺し、予言通りマクベスは国王の座に就く。同じく予言を聞いていたバンクォーも脅威の存在となり、マクベスは地位を失うことへの不安から邪魔者を抹殺していく。

## 魔女の予言

*Macbeth* の冒頭には、以下の通り魔女3人が同時に発するセリフがある。魔女の言葉はマクベスの心に深く刻まれ、マクベスの運命を変えていく。<sup>3)</sup>

All

Fair is foul, and foul is fair:

Hover through the fog and filthy air. (*Macbeth* I. i. 12-13)

魔女3人

きれいは汚い、汚いはきれい

さあ、行こう、霧のなか、不穏な空気をかいくぐり [拙訳]

わずか2行の引用だが、英詩の技法としては oxymoron (オクシモロン)、refrain (リフレイン)、rhyme (脚韻)の類が使われ、さらに [f] 音の alliteration (頭韻)効果が全体に響き渡っている。“fog”は単純に「霧」と訳したが、例えば ‘in a fog’ とすれば「五里霧中」となることからわかるように、この語は何か混乱状態にあることを意味する。同様に、“filthy air”は直訳では「汚れた空気」となるが“air”は ‘in the air’ とすれば「はっきり定まらない」という意味になり、泥沼化して何か未解決のものが存在することがわかる。また、脚韻部は“fair”と“air”が対置され、予言的ではあるが自身の存在、王としての「正当性 (fair)」が「はっきり定まらず (air)」、懐疑的なマクベスの心境が表わされているようである。自分は〈神に選ばれし者〉としての正当性があるのか、それとも王位は〈人間の奸佞邪智〉によって得られたものなのか。この二項はまるで十字架によって象徴される図式を想起させ、縦軸と横軸の交叉にあるマクベスの〈葛藤〉は自身の心に暗い影を落していく。Horizontal な層にうごめく多くの群衆と、その平面をよぎる vertical な要素—— elusive だが、確かに介在する要素—— この対立の中にあるマクベスの姿は、現代に生きる私たちに強烈な現実感

をもって迫り来る。この horizontal な世界を垂直にたちきるものは、永遠に交わり得ぬ人と神との関係において神の側からさしのべられた、とりなしの梯子でもある。一方的な無償の愛 (gratia) の招きによって人は神との〈コイノーニヤ〉を得たが、時の経過と共に人間は本来のいさをなき自分を忘れ、神の愛が自分の上にとどまったのは自分がその愛に値するものであり、自分の〈いさをし〉の故であると誤解した。そこから人間は各自のいさをしを胸算用し、私語が始まり、自己主張がはじまる。つまり、人間の勝手な解釈によってものごとは様々な意味をもって目の前にあらわれる。

“Fair is foul, and foul is fair” とは、端的に言えば「二元論的思考の絵解き」<sup>4)</sup>であり、また equivocation (真偽二律背反性) の問題である。フッサールの「現象学的還元」を心に留めながら言葉添えると、例えば〈アルコール〉と言えば、ある人にはそれが〈手指消毒剤〉に見え、またある人にはそれが酒やビールなどの〈飲料水〉として見える。また、ある人にはそれが〈塗料剤〉として想起されるかもしれない。現象学的に言えば、「志向性」の違いによって見える「生活世界」が異なる。すなわち対象の「射映」構造では「同一性のもとでの多様性」が認められ、特定の位置からは特定の側面しかみることができない。人は目に映るいくつかの〈現れ〉を統合して認識するが、実際に確かめられるのはそれらの一部でしかない。それゆえに対象についての認識は、常に誤謬を生む可能性を含んでいる。人は期待していた結果が得られず、真理のうちに安らぐことが難しくなる。結局、「経験の中で真理が生成する」ためには〈経験の地平〉を拡大し、時間的に経験を積み重ねていくしか術がない。

マクベスは自然的態度で得られる確信を何度も「エボケー」し、ダンカン王殺害を躊躇していたが、これに対して夫人はまるで我が子を諭す母親のように、マクベスを叱咤激励する。ある時、ダンカン王がマクベスの城を訪問した際、表面の装いとは裏腹に内面には殺意をひた隠すよう、夫人はマクベスに進言する。

To beguile the time,  
Look like the time. Bear welcome in your eye,  
Your hand, your tongue. Look like th' innocent  
flower,  
But be the serpent under't. (Macbeth I. v. 74-78)

悟られぬよう、平静を装いなさい。

目と手と言葉には歓迎の意を示すのです。

無垢な花のごとく見せかけて

陰に蛇を潜ませるのです。

[拙訳]

野心家は素知らぬ顔をして計画を進め、時が来れば〈涼しい顔をして〉(“like the time”)、迷いなくそれを実行する。人を欺くためには世間と同化するための〈潜伏する時間〉(“beguile the time”)が必要である。人は〈外見〉(“eye”, “hand”, “tongue”) で人と交わり、「無垢な花」(“innocent flower”) のように振る舞うが、その裏には邪悪な「蛇」(“serpent”) が潜んでいる。舞台をみつめる観客の目には、シェイクスピアが常套手段として用いる ‘appearance’ と ‘reality’ の違いによる陰

謀や裏切りがみえているだろう。善良なダンカン王の運命は権謀術策の手にあるが、観客はその reality を舞台の役者に伝えることができず、憐憫の情を抑えながら客席（又は立見席）で身悶える。

次に、マクベス夫人は我が子の成長を見守る母親が、まるで子どもの〈自己診断テスト〉の評価票を手にした時のように、夫の性格を次のように分析する。

Yet do I fear they nature;

It is too full o' th' milk of human kindness

To catch the nearest way.

Thou wouldst be great,

Art not without ambition, but without

The illness should attend it. What thou wouldst

highly,

That wouldst thou holily; wouldst not play false

And yet wouldst wrongly win.

(*Macbeth* I. v. 16-23)

ただ心配なのはその御気質、  
事を手っ取り早く運ぶには、  
人情という甘い乳がありすぎる、  
大望はお持ちでしょうし、野心もないわけではない、  
でも、それを操る邪な心に欠けておられる。  
手に入れたいと望みながらも、  
手を汚すことは望まない。  
曲がったことは嫌いだといっても、  
筋を曲げてでも勝ちとりたいという。 [拙訳]

マクベスは生来的に罪を犯すような人ではなかった。マクベスは罪を犯せば「常にこの世で裁きがくだるもの。血なまぐさいことを誰かに教えれば、それが禍となって教えた者にはねかえってくる。」[拙訳] (We still have judgment here, that we but teach / Bloody instructions, which, being taught, return / To plague th' inventor.) (*Macbeth* I. vii. 8-10) と呟き、人道に悖る行為を嫌っていたはずである。<sup>5)</sup>ところが、マクベス夫人は夫の煮え切らない態度を男らしくないとして叱責し、自分にもこのような勇気があるのだから、夫として実行する勇気を持つべきだ、とマクベスに迫った。

I would, while it was smiling in my face,

Have plucked my nipple from his boneless gums

And dashed the brains out, had I so sworn as you

Have done to this.

(*Macbeth* I. vii. 64-67)

私の顔に微笑みかける赤ん坊の  
柔らかい歯茎から乳首をもぎ取り、  
その子の脳味噌を叩き出してみせます。  
先ほどのあなたのように一旦やると誓ったなら。 [拙訳]

マクベスは罪悪感に苛まれながらもダンカンを暗殺。念願叶って国王の座に就くが、精神的狂乱がマクベスを襲う。結局、邪悪な行為の代償は、〈不眠〉による苦悩というかたちで迫り来る。

Methought I heard a voice cry "Sleep no more!  
Macbeth does murder sleep" — the innocent sleep,  
Sleep that knits up the raveled sleeve of care,  
The death of each day's life, sore labor's bath,  
Balm of hurt minds, great nature's second course,  
Chief nourisher in life's feast. (Macbeth II. ii. 47-52)

叫び声が聞こえたようだ、「もう眠るな！  
マクベスは眠りを殺した」— 罪なき眠り、  
心の煩いでもつれた糸を解きほぐす眠り、  
それは日々のいのちの終わり、辛い労働の後の湯浴み、  
傷ついた心を癒す塗り薬、大自然が与える贅沢な食事、  
人生の饗宴の最高のひと皿となる。 [拙訳]

引用4行目にある“The death of each day's life”の“life”は「いのち(命)」と訳したが、睡眠は一日の生活の終わりにあることから、これを「生活」と訳すことも可能であろう。しかし、ここでは生命の維持に必要な〈睡眠〉が奪われたことへの嘆きが示されているので、「いのち(命)」とした方が合致する。不眠を訴えるマクベスに対して夫人は「そんなに思い詰めてはいけません」(Consider it not so deeply.) (Macbeth II. ii. 41) と助言するが、マクベスにとって睡眠という〈休息〉の喪失は夫人が考える以上の絶望感であり、人生の苦悩であった。

マクベスは墓に眠るダンカン王の寝姿を想像して、「ダンカンは墓の中にいる。人生という熱病の発作もおさまり、ぐっすり眠っている。」[拙訳] (Duncan is in his grave. / After life's fitful fever he sleeps well. (Macbeth III. ii. 25-26)) と述べ、死して〈安らかに眠る〉ダンカン王の姿と、〈不眠〉で苦しむ自分の形姿を比較考量する。自分は救われるのか、神の愛を受けるのにふさわしい者であるのか、波のように繰り返されるこの自問に、神は沈黙をもって答える。しかし人間はこの沈黙に耐えきれず、我とも知らず自己推量が始まる。この場合、救いの先行条件として〈私〉が主格となるが、神からの救済が期待できなければ、残された道はただ一つしかあり得ない。それは我執の罪にくもった眼を透明にして、知られざる神の訪れを待つことである。それは自我の剥奪の道でしかない。〈我〉からしがみつ়くのではなく、ただ彼方から自分の方に向かってくるものが、からみついてくれないか、と祈りを捧げるのみである。この変化は主客の逆転でもある。マクベスの〈不眠〉はある意味

では〈我〉に囚われた意識を内面に向けさせる契機となり、また、登場人物の〈手〉に付着した殺戮の〈しるし(血痕)〉は各人が内省し、復活・再生に導かれることを暗示させるものである。言うまでもなく、それは「イエスの聖痕」(ラテン語では Stigmata)のイメージがオーバーラップされている。人は〈あの手・この手〉、〈陰に陽に〉、そして〈硬軟織り交ぜて〉、自分の願いを叶えようとする。

## 「手」の象徴性

戯曲『マクベス』のト書部分を除いた台詞には、以下の通り計33ヶ所に“hand(s)”「手」という語が使われている。<sup>6)</sup> 本稿筆者は意味内容を考慮し、この語が使われている箇所を A. 親和・連携、B. 公正・正義、C. 野望・仕業、そして D. 血・邪悪さ・恐怖の4項目に分類した。

### A. 親和・連携

1. Which ne're shook **hands**, nor bade farewell to him. (I.ii. 23)  
握手も別れの挨拶もなしに
2. The Weird Sisters, **hand in hand**. (I.iii. 33)  
運命をあやつる三姉妹、手と手をつないで
3. Bear welcome in your eye, / Your **hand**, your tongue. (I.v.75-76)  
目、手、口にも歓迎の意を示す
4. Give me your **hand**. (I.vi. 36)  
さ、お手を
5. There would be **hands** uplifted in my right; (IV.iii.52)  
私のために戦おうとする者もいるだろう。
6. Give me your / **hand**. (V.i.70-71)  
さ、お手を

### B. 公正・正義

1. This even-**handed** justice (I.vii.10)  
公正な手を持つ正義の神
2. In the great **hand** of God I stand, and thence (II.iii.152)  
大いなる神の御手に身を託し
3. Such sanctity hath heaven given his **hand** (IV.iii.164)  
天から授かった聖なる力が込められている手
4. I hope the days are near at **hand** (V.iv.1)  
心配なしに眠れる日がそこまで来ている

C. 野望・仕業

1. The eye wink at the **hand**, yet let that be (I.iv. 59)  
目は手の仕業を見て見ぬふりをしろ
2. The handle toward my **hand**? (II.i.45)  
短剣の柄を私の手に
3. What **hands** are here! Ha, they pluck out mine eyes. (II.ii.77)  
この手は何だ、俺の目玉をえぐりだす
4. Thence to be wrenched with an unlineal **hand**, (III.i.68)  
赤の他人の手にもぎ取られる
5. How you were borne in **hand**, how crossed, the (III.i.88)  
どんな風に丸め込まれたのか
6. Whose heavy **hand** hath bowed you to the grave (III.i.100)  
あいつの手が力づくでお前たちを墓穴に押し込み
7. Strange things I have in head that will to **hand**, (III.iv.171)  
ただならぬことが頭に浮かび、手に乗り移る
8. Under a **hand** accursed. (III.vi.55)  
呪われた手に抑えられ
9. The firstlings of my **hand**. And even now, (IV.i.168)  
時を移さず手に渡す。今こそ、
10. (Who, as 'tis thought, by self and violent **hands**, (V.viii.83)  
自らその狂暴な手によって

D. 血・邪悪さ・恐怖

1. As they had seen me with these hangman's **hands**, (II.ii. 38)  
首切り役人の手をした私
2. And wash this filthy witness from your **hand**.— (II.ii.61)  
手についた証拠を洗い落とせ
- 3-4. Clean from my **hand**? No, this my **hand** will rather (II.ii.79)  
この手から血をきれいに洗い流せるか？駄目だ、逆にこの手が
5. My **hands** are of your color, but I shame (II.ii.82)  
私の両手もあなたと同じ色
6. Their **hands** and faces were all badged with blood. (II.iii. 120)  
手も顔も血まみれでした
7. And with thy bloody and invisible **hand** (III.ii.54)  
血に飢えた見えない手で
8. What is it she does now? Look how she rubs / her **hands**. (V.i.28-29)

- 何をしているのか、あんなに手をこすって
9. seem thus washing her **hands**. I have known her (Vi.31)  
手を洗っているつもりなのか
  10. she now? What, will these **hands** ne'er be clean? No (Vi.45)  
この手は二度ときれいにならないのか
  11. the perfumes of Arabia will not sweeten this little / **hand**. O, O, O! (Vi.54-55)  
この小さな手はアラビア中の香料をふりかけてもいい匂いにならない
  12. Wash your **hands**. Put on your nightgown. (Vi.65)  
手を洗って、寝間着を着て
  13. His secret murders sticking on his **hands**. (V.ii.20)  
密かに行った殺戮の血が手にこびりついて

上記分類の結果、魔女の予言にあった「きれいは汚い、汚いはきれい」と同様に、分類項目は二律背反的なものとなった。例えば、A項目の「親和・連携」のような融和的な **hand** は、C項目の「野望・仕業」の陰謀的な **hand** と相反する。又、偉大なる神の力を示す B項目の「公正・正義」は、D項目の殺戮の血、邪悪な行為などと対極的な関係にあることがわかる。特に D項目については、まるで T.S. エリオットの『荒地』を織りなす地獄の亡者の騒がしい *twittering voices* のように、登場する群像は勝手な呟きを繰り返す。利己的な計らいによって神の啓示は曇り、人々は深い溝を前にしてありのままの現実と罪とを、徹底的にわがものとしてひきつけ、肯定し、もだして待つしかない。手に付着した血は、どんなに擦っても、洗っても、消し去ることができず、T.S. エリオットの言葉を借りれば、「全地球は病院だ」(“The whole earth is our hospital”)<sup>7)</sup> という状態である。通常の認識からすれば狂気に類すると思われる目覚めた意識の中で罪は肯定され、どん底においてはじめて新しい泉が湧き出る。それゆえに薄明の世界から闇の世界へと移る過程は、一步一步、確実に個我の剥奪の道を刻んでいく。

Tomorrow and tomorrow and tomorrow  
 Creeps in this petty pace from day to day  
 To the last syllable of recorded time,  
 And all our yesterdays have lighted fools  
 The way to dusty death. Out, out, brief candle!  
 Life's but a walking shadow, a poor player  
 That struts and frets his hour upon the stage  
 And then is heard no more. It is a tale  
 Told by an idiot, full of sound and fury,  
 Signifying nothing. (Macbeth V. v. 22-31)

明日、明日も、また明日も、  
 小刻みな足取りで一日一日を歩み、



歴史の最後の言葉にたどり着く。

これまでの日々は、愚か者が終には塵となる

死への道を照らしてきた。消えろ、消えろ、束の間の灯火。

人生は歩く影に過ぎない、哀れな役者だ、

出場の間は舞台上で派手な身振りや悩みもするが、

袖に入ればそれっきりだ。

人生は白痴がしゃべる物語だ、声は大きく猛々しいが、

そこには何の意味もない。 [拙訳]

有限の時は人の目から永遠の秩序を掩い隠す。やがてマクベスは我執の砦を叩き壊し、他界の照射を待ち望むにふさわしい心の真空を得ることを希求する。引用部5行目にある ‘The way to dusty death.’ 「愚か者が終には塵となる」とは、思いを淨めて透明な眼に帰することを希うマクベスの祈りであろう。「塵は元の大地に帰り、息はこれを与えた神に帰る。」(コヘレトの手紙12.7) 我執の眼の喪失につれて明確な輪郭を刻んでいた〈あらわれ〉の世界はぼかされて視界は狭められるが、逆に心の眼はこれまで見えなかったものの内密な実相に向かって開かれていく。以前は *hints and guesses* でしか示されなかった他界の照射は、T.S. エリオットの表現を借りれば、「透明な静けさでもものの形を包み、とこしえを偲ばせるゆるやかな廻転の中で、影を変じて瞬時の美と化す。(拙訳)」(Investing form with lucid stillness / Turning shadow into transient beauty / With slow rotation suggesting permanence) (*Four Quartets*, B.N.III) ということになる。人の世の苦悩は〈神の経綸〉の中では愛の別の顔として、試練のいたわりとしての目的と意味を担う。新しいあやまちと失敗を繰り返し、(“Tomorrow and tomorrow and tomorrow”) 人の世の営みの一切は、むなしいものがあるかも知れない。(“Life’s but a walking shadow, a poor player”) 人は対象化できないはずの神の属性を意義づけようとして、あらゆる試みを続けてきた。これは限りある言葉による、限りなきものへの接近といえるだろう。人はそれぞれが思考原理を働かせ、多少の制約はあっても不完全なままに自分の前に神を置いた。ある時は公正と正義の神として、ねたみの神として、愛 (mercy) の神として、そして怒りの神 (mastery) として。しかし、一切の断定が否定でしかあり得ないこの世界では、恣意的選択にとどまる。(“It is a tale / Told by an idiot, full of sound and fury, / Signifying nothing”.)

このような徒労とも見える営みの中にも、シェイクスピアはマクベスの死において完成されるものを見てとろうとする。それは神の恩寵によって再生される、新しい人の世の営みである。

That calls upon us, by the grace of grace,

We will perform in measure, time, and place. (*Macbeth* V. viii. 85-86)

私になすべきことは、神の恩寵を仰ぎ、

手段、時、ところを得しだい実行する。 [拙訳]

これは戯曲の最後で語る新国王マルカム (ダンカン王の息子) の台詞である。自覚が深まれば深

まるほど、同時にまた他の存在するものとの一体性を自覚する。自分の差配ではできないものがあることを意識し、人間を超えた何かに祈るといふ仕方でその度合いは変わってくる。つまり、祈りの中で祈りの質が変わってくる。また、マルカムの使う言語は discursive language であり、可能な限り ambiguity を排除し、non-verbal fact に対しても一対一の直接対応関係を結ぼうとする。context 中の単義的に限定された語を運用し、可能性をもつ他の結合関係を除去することによって、言語は意味の明晰さを獲得する。しかし、この明晰さとは、その語が内包する内的生命力の除去によって成立する。だから、syntax という有機体構成体の中で一語の意味の振幅は大きくならず、知らず知らずのうちに因襲的な陳腐な言語になりかねない。

### マクベスの何が問題なのか

『マクベス』第3幕5場において3人の魔女とヘカテが登場。ヘカテの台詞にマクベスの問題点を指摘した部分がある。

As by the strength of their illusion  
Shall draw him on to his confusion.  
He shall spurn fate, scorn death, and bear  
His hopes 'bove wisdom, grace, and fear.  
And you all know, security  
Is mortals' chiefest enemy. (Macbeth III. v. 28-33)

その幻想に惑わされて  
あいつは混乱に陥ったのだ  
運命を蹴飛ばし、死をあざけり、  
神の知恵も、恩寵も、神への畏れも忘れ、野望のとりこだ。  
分かっているだろうが、人間の大敵は執着心なんだ。 [拙訳]

脚韻の “illusion” と “confusion”、そして “bear” と “fear” が対置され、魔女の予言が引き金となり、マクベスが野望に執着し、精神的混乱をまねくことが暗示されている。さらに今の地位が他人に奪われるのではないかという恐怖と、人を殺めたことに対する罪の意識が反映されているようでもある。逆に言えば、魔女によって自身に内在する邪悪な心に火がつけられなければ、マクベスは神と共にあり、神から与えられた calling を成就できたかもしれない。「その日、その時は、誰も知らない。天使たちも子も知らない。父だけがご存じである。気をつけて、目を覚ましていなさい。その時がいつであるか、あなたがたは知らないからである。」(マルコによる福音書 13.32-33) マクベスはダンカン王暗殺後、〈不眠〉に悩まされていたことは先述の通りであるが、ある意味ではこの不眠症状は、マクベスが性懲りもなく繰り返してきた神のわざに対する冒瀆を詫び、神の赦しを願う証ではないか。マクベスはその時が来るのを不安の中で待ち望む。〈我〉は〈我〉を問い、自らを

責めさいなむ、裸形の〈我〉のうめきが伝わるようである。

## 自己修正には言語の力が必要

I.A. Richards は我々の精神は白紙ではなく、既に *primordial generality* とでも言うような過去の総体としての「楚辞」(context) が存在し、そこに外界の新しい刺戟が類として把握され、意味を構成すると解釈する。<sup>8)</sup> すなわち既に存在するものを新しい刺戟との関係において再び現在化 (re-present) するのが心の働きだという。新しい経験が意味ではなく、意味とは過去から潜在して既にあった、内包された context の〈内〉にある。その意味を絶えず再構成していくのが心の働きである。例えば、他人から親切にされた時、〈それをそれとして〉認識するためには、過去において親切にされた経験があり、〈これが人のやさしさなんだ〉という感動の記憶が脳に刻まれている必要がある。つまり、親切という〈雛形〉(フォーマット) が内在されていれば、新しい親切に出会った時、〈それをそれとして〉認識することが可能となる。例えば日本では感謝の印として返礼品を選ぶ際に、〈思いをかたちにする〉という表現を使う時がある。目にはみえない〈感謝〉の気持ちを品物に込め、それを特定の人に届けることで感謝の証とする。これも贈る側と受取る側の双方において、過去の経験が相互理解の基盤となっている。このようなコミュニケーションを可能にするのは〈言語〉の力であり、その理論的背景はピアジェ、そしてヴィゴツキーの「内言・外言」を含む「言語発達理論」にある。マクベスに話を戻せば、たとえ魔女によって「野心」という〈コア〉がマクベスに埋め込まれ、又は内在されていたものが引き出されたとしても、様々な状況下で自己修正が図られれば、その人生はまた違ったものになったはずである。その修正のための最大の武器が先述の通り〈言語化能力〉である。刻一刻と目まぐるしく変化する世界を円滑に言語化 (decode) する高いスキルがマクベスにあったならば、状況把握が容易となり問題解決のための方策が得られたかもしれない。

さらに、I.A. Richards の考えでは、<sup>9)</sup> 何ものかに意義を見出すこと、そして意味付けの働きは一種の合理化であり、秩序化である。人は在来の因果律の種類にあてはめ、目的に合うように context の中から特定のものを選択し、それに原因を配分しようとする。原因とされるものは複雑で単一ではないが、人による合理のメスは惜しげもなく他を除去し、一つを選んで単一の因果の線として秩序立てる。だから因果のからくりには恣意性があり、現実とは恣意的選択による合理化では秩序づけられない、埋もれた多くの局面、*logical beyond* が内在することになる。マクベスはこの *logical beyond* を多く抱え過ぎ、恣意的選択による合理化ができなかった。だから悩み苦しむことが多くなり睡眠障害を患ったとも考えられる。この *logical beyond* の設定値は個人によって異なるであろうが、パソコンの演算装置 (CPU) と同様に、自分の処理能力を超えた言語処理を行えば、フリーズ状態になることは明白である。さらに目には見えない超自然的な存在である魔女の言葉に対応すれば、*syntax* がどうだとかのレベルではなくなる。マクベスは詩的な心を持ち過ぎた。魔女、ギリシャ神話の魔術を司る女神ヘカテ (Hecate)、幽霊など超自然の霊的存在との遭遇も、マクベスの心柄によるものである。

## 見えない自分とどう向き合うか

マクベスには信頼し寄り添う人がいなかった。この世には目には見えない人と人とを結ぶ〈糸〉のようなものがあり、それは過去から現在までを貫く縦糸に時代ごとの横糸が織り込まれ、私たちを包み込む丈夫な布地へと変化している。マクベス（大学生）にこの〈ご縁〉という糸がどのくらい見えているであろうか。ある人が主張する〈自分は自分〉という思いは、自分自身が様々なバランスの上に成り立っていることを理解せず、虚像を実像だと信じる精神からきているのではないか。細胞レベルでは新しい自分が刻一刻と形成されると考えるならば、今の自分など存在しないことになる。（“Life's but a walking shadow, a poor player”）したがって発想の転換を図り、自分というものをあえて意識しない心を持つことも大切ではないだろうか。自他の区別をなくした忘我の精神をもつことを、人生の選択肢として考えてみるもの良いかもしれない。

禪書『虚堂録』にある唐の詩人千 良 史作『春山夜月』という詩には次のような言葉がある。虚堂きどう智愚ちくぜんじ禪師（1185-1269）が禪的に解釈して使い、今では禪語として愛誦されている。

掬水月在手 （水きくを掬すれば月手に在り）  
弄花香满衣 （花ろうを弄すれば香衣に満つ）

川面に両手を入れて水をすくえば、そこには月が映る。また、花をかざせば衣に花の香りがしみこむ。月は月、花は花、そして私は私であるという個別的な考えををするならば、このような詩は生まれない。月のような大きさでも掌の中に入り身体の一部となる。月も花も私も隔てなく、人は自然と一体になる。私たちは五感を通してものごとを認識し、〈見るもの〉と〈見られるもの〉、〈主観〉と〈客観〉とに分けるが、このような対立概念を抱き続けるならば、自他一如の世界に到達することはできない。忘我の境地とは、ある事に没頭して雑念を離れた状態のことをいう。

また、鑑智かんち僧璨そうさん大師だいしの『信心銘』しんじんめいの中には次のような言葉がある。

不識玄旨 徒劳念静 （玄旨げんしを識らざれば、徒らいたずに念静ねんじょうに勞ろうす）

「玄」とは目視できないことを意味する。例えば、深くて暗い井戸の底は目には見ることができないが、底があると信じることはできる。実際に竹の棒などを井戸に差し込んで底を探れば、確かに底があると実感する。つまり物事は必ずしも見た目通りとは限らないということであり、それが「玄旨」という意味である。この「玄旨」を識らずに、ただ観念的に〈金持ちは幸せで、貧乏人は不幸せ〉、そして〈一流企業は幸せ、三流企業は不幸せ〉と単純に考えれば、人は嫌な気分になり嫉妬心も湧いてくる。実際に、金持ちや一流企業勤務が幸せだとは限らない。したがって玄旨を識れば、自ずとそこに精神的な落ち着きが生まれる。又、良いとか、悪いとか、その判断に固執すれば、心が落ち着かずに葛藤が生じる。禪的に〈無心〉の境地とは、精粗せいそに心を奪われぬことである。

## まとめ

マクベスが荒野で出会った魔女の〈言語〉は、人間のそれと同じものなのか。仮に同じ言語だとしても、先述の通り魔女の言葉は象徴性に満ちており、その意味解釈には恣意性がある。だから必ずしもマクベスの解釈が客観性を持っているとは限らない。次に、マクベスに内在するであろう「理想自己 (ideal-self)」は、魔女が示した予言と同じものなのか。それともその予言は単なる「義務自己 (ought-self)」であったのか。戯曲の中ではその点がはっきりしないが、根本的に「自分はどういう存在であるのか」という哲学的な問いかけに確かな答えを持つことが、自己形成にとって重要である。「自己概念」(self-knowledge)、そして「アイデンティティ」(identity)の問題も大切であるが、少なくともマクベスには武将としての「アイデンティティ」は確立されていた。武将として優れた能力があったので、有縁<sup>うおん</sup>を逐<sup>お</sup>うこと莫<sup>な</sup>く、いずれは出世したであろう。魔女の予言はマクベスの運命を変える契機となり、結果的にみれば悲劇に導く邪悪な言葉となった。その責任はマクベス個人にあるとして処理されるかもしれないが、大学教育に携わる者として、誰もがこの〈魔女〉の立場になり得ることを、あらためて肝に銘じたい。

水自茫茫花自紅 (水は自ら茫茫<sup>おのづか ぼうぼう</sup>、花は自ら紅<sup>おのづかくれなぬ</sup>なり)

この言葉は廓庵和尚の『十牛圖頌』第九「返本還源」にある。個人の努力や修行の程度に関係なく、自然にある潮水は一面に広がり、花は赤く色づいている。ありのままの存在をありのままに観る。見たままの世界が真実であり、その世界と一体になる。まだ目にするできない「理想自己」を追うことは必要かもしれないが、今ある自分をみつめ、今ある自分を実感することも、時には大切ではなからうか。

## 注

- 1) Rogers, C.R. *Client-centered therapy: Its current practice, implications and theory*, (Boston: Houghton Mifflin, 1951.)  
Rogers, C.R. & Dymond, R.F. (Eds.) *Psychotherapy and personality change: Co-oriented research studies in the client-centered approach*, (Chicago: The University of Chicago Press, 1954.)
- 2) Higgins, E.T. 1989 Self-discrepancy theory: *What patterns self-beliefs cause people suffer?* In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in Experimental Social Psychology*, Vol. 22. (New York: Academic Press. pp.94-246.)
- 3) *Macbeth* のテキストについては追跡・参照がしやすいように以下の通り Folger Library のサイトを使用した。 <https://shakespeare.folger.edu/shakespeares-works/macbeth/>
- 4) 三島由紀夫『三島由紀夫文学論集』「序文」(講談社 1970 年)
- 5) ここには聖書にある「復讐は私のすること、私が報復する」(ヘブライ人への手紙 10.30) という言葉が裏打ちされ、神の摂理の証明、罪の報償が証されている。尚、本稿では聖書の記載はすべて『聖書』日本聖書協会 2018 のものを使用した。
- 6) 数字の 33 について考慮すれば様々な憶測を呼ぶ。一般的に Angle Number (Spiritual Symbol) と呼ばれるこの数字は、例えば「アーメン」(Amen) を意味するとか、聖書に特定の名前が出る回数とか、諸

説ある。日本でも国宝三十三間堂の33という数字はすぐに思い浮かぶであろう。イエス・キリストの死亡年齢も33であったという話もあるが、どの暦を使うかで結果は異なる。おおよそ33-40歳であったという見方が有力である。参考までに以下のような記事もある。“However, Bond makes the case Jesus died around Passover, between A.D. 29 and 34. Considering Jesus’ varying chronology, he was 33 to 40 years old at his time of death”. (USA TODAY, “How old was Jesus when he died? Why scholars are not in agreement on it”. Aug.7, 2022).

- 7) T.S. Eliot, “East Coker” from *The Four Quartets*, (Faber & Faber, London, 1996.)
- 8) I.A. Richards, *The Philosophy of Rhetoric*, (Oxford University Press, New York, 1981, pp.23-43.)
- 9) I.A. Richards, *Principles of Literary Criticism*, (Routledge, London 1989, pp.33-43.)